

山田方谷は財政改革を行うと同時に軍制改革にも着手した。手薄な藩士を補うため、方谷が新たに考え出したのが「里正隊」という農民の制度である。当時の領民の約8割は農民であり、圧倒的多数の農民を兵力に引き入れて富國強兵を図った。安政5(1858)年、長州藩の吉田松陰門下の俊英久坂玄瑞は備中松山藩の里正隊を視察して「長州の銃陣遠く及びところにあ

透野島——緑地帯

らす」と感嘆した。

この5年後の文久3(1863)年、高杉晋作が農民たちによる「奇兵隊」を組織した。この奇兵隊が明治維新の

山田方谷の夢実現①

原動力になる。

方谷の財政再建は7年間で黒字に転じた。その成功のおかげで方谷の上司である藩主板倉勝静は江戸幕府の首席老中となる。方谷も江戸に出て

江戸幕府の政治顧問になる。

安政の大獄で吉田松陰は江戸で刑死になったが幕府はその遺骸を下り渡さなかった。そこで久坂玄瑞が方谷に「遺骸だけでも下り渡し

てほしい」という、涙の出るような手紙を書いた。その後、下り渡しが行われたのである。

福山藩には有名な儒者関藤藤陰がいた。頼山陽の弟子で首席老中阿部正弘に仕えた。

藤陰は方谷とも交流があり幕末の難しい時期に方谷の意見も聞きながら、福山藩のかじ取りを行った。備中松山藩は藩主が徳川慶喜將軍の最後の首席老中だったこともあり明治政府軍から攻撃された。方谷は戦争で困るのは農民だからと、主戦論を退け松山藩を戦火から救った。方谷は領民第一主義を貫いたのである。

(財務省大臣官房会計課長 東京在住)